

第4章 南方熊楠「萃点の思想」と「事の学」⑥

元おやさと研究所長
井上 昭夫 Akio Inoue

第六節「元の理」マンダラ初出と「規矩」

人間の創造・救済説話として知られる「元の理」研究は、戦後の復元において『天理教教典』の公刊とともに始まったと言えるであろう。それまでの研究資料としては「おふでさき」(昭和3年公刊)の主として第三・第六号、教祖がよしとされなかった、教祖側近の人たち作のいわゆる「こふき」本、すなわち一般に「泥海古記」という表記で呼称され、官憲の取り締まりの対象ともなった書物があった。「元の理」の根幹は、現在は『天理教教典』の第三章に掲載されているが、教典では「元の理」は立教の由来や「つとめ」の根拠付けとなっている点に力点がおかれ、「元の理」から天理教独自の宗教的世界観を抽出する研究はなされていなかったことはいなめない。中山正善著の昭和32年初刊『こふきの研究—成人譜その三』(43頁)にも、明治20年1月4日の「おさしづ」の割書き「世界並の事二分、神様の事八分、心を入れてつとめをなす事、こうき通りに十分いたす事」を引用して、「こうき」とは、かぐらつとめに関することであり、心を入れてつとめをなす事、即ち、「こうき通りに十分いたす事」であり、「こうき通り」とはつとめに関してお話下された親神の思召通りに勤めることを意味していると解釈されている。しかし著者はこれにつづく泥海「古記」の音義の研究から、結語においては「こふき」とは、教祖が口述をもって、取次を仕込む上から、「筆執り学人」として取次に筆を執らしめ、取次の台本とされた「口記」の方が、本来の意味を移す文字ではないかということを書いて記している。そこで当時天理教教養問題研究室に在籍していたわたくしは、天理やまと文化会議を主催とし、天理教立教150年記念事業として「元の理」の世界—天理教学研究の展開を目指して」と題して、昭和62(1987)年10月24日から5日間のフォーラム開催にこぎつけた。その実践教学には「筆執り学人」の意味の拡大解釈をとおして、世界における教内外の著名な碩学による学際的な「元の理」研究の協力を得て、その「知恵の仕込み」を「ぢば」という「萃点」に終結し、「元の理」から世界的な思想・哲学が「文字の仕込み」とおして抽出できないかという理想があった。新研究の果実の一部は『講座「元の理」の世界』全7巻や『G-TEN』(60巻)特集に適宜編集掲載した。このフォーラムの講演要旨集の表紙を飾っているのが、熊楠曼荼羅の「萃点」を連想させる図①の「元の理」マンダラの初出である。

さて、前述の記念フォーラム「元の理」の世界」講演の中で、密教学を専門とする松長有慶は「元の理」と仏教の曼荼羅の世界観を解説し、「元の理」は日本的な曼荼羅であろうと述べている。ここでいう日本的な曼荼羅とは、いうまでもなく天理教を、神道や日本の土俗信仰とは別個の、有神論的世界宗教と位置付けたうえでの発言である。両者の関係について考察するまえに、松長は「元の理」と密教のもつ思想には次の3

点の共通点と相異点があると述べている。両者の共通点としては、1、中心の周囲に神々を配置する。2、陰陽、男神・女神に对照。3、カオスとコスモスの一体性。相異点とみなされるのは、1、人類創造の物語と観想図。2、中央に位置するものの有無。3、周辺の神々の性格の違い。などであり、その両者の構造を視覚化すると「元の理」では親神によって創造された人間が生きるために必要な守護・道具として六種の動物、すなわち六柱の神名が与えられ、中央軸の左右、その上下に配される。対して、マンダラは大日如来を中心に四仏と四菩薩が取り囲み、その周囲に仏、菩薩、明王、さらに外周には動物や民族神が配されるのが両者構造の類似性であるとする。また「元の理」の六柱の神は、故蔵内数太(元日本社会学会会長・大阪大学名誉教授)の「規矩」図が示すように、東側に女神三柱、西側に男神三柱と対応して配せられているが、マンダラには、このような対応関係は見られず、女神は散見するにすぎないが、8世紀以後の後期密教のマンダラでは、女神は圧倒的に優位に立つ。また相異点として「元の理」には人間世界創造の壮大な神話が描かれているが、仏教では人間創造については黙して語らない。密教のマンダラは行者が「瞑想」するとき、心の中に観ずる映像を視覚化したものであり、仏、菩薩、明王それぞれは、色、形、因契、座、位置、などいずれも象徴的な意味が与えられているという。密教行者の厳しい「観想」は、天理教では「思案」という言葉に相当すると思われるが、1,711首からなる「おふでさき」は「この話合図立て合出たならば 何についても皆この通り」「これをはな一列心思案頼むで」(十七号74～75)と「思案」の強調で終わっているにもかかわらず、天理教者は思案の修行内容やその「かたち」においてはほとんど無関心である。きびしい「瞑想」・「思案」の実践が欠落した教学研究は、真の「筆執り学人」による「口記」の完成には接近しえないであろう。しかし「元の理」については、1962年以降、従来の天理教学研究史を超えた、宗教学、哲学、神話・民族学、動物学、進化論、東洋思想史、経済学、言語・歌学、比較文化論、宇宙論、環境・生態学、人間学、翻訳論などの学際的視野から、さまざまな刺激的・斬新的な解釈が教内外・国内外の著名な学者・知識人によって試みられてきた。それらは『講座「元の理」の世界』全7巻(天理やまと文化会議編)にまとめられている。拙著『中山みき「元の理」を読み解く』(日本地域研究所、2007年、608～614頁)を参照いただきたい。



図1 天理教立教150年記念フォーラム講演要旨集表紙、1987年作

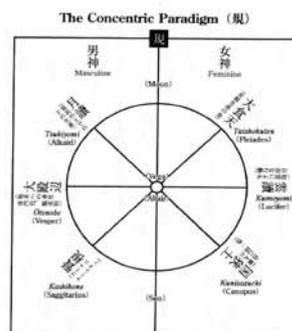


図2

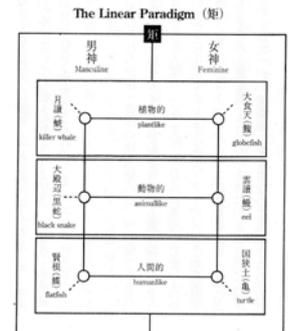


図3

(15頁へ続く)

(4頁からの続き)

たとえば「元の理」解説において、独自の思想を開拓した故蔵内数太は、従来荒唐無稽なおとぎ話のようにアカデミズムから見られてきた「元の理」は、実は世界の大きな思想の流れと結びついていて、世界思想を一方に考えることなしには味わえることはできないと主張している。ここに紹介するのは、蔵内が解説した「元の理」のグラマーと規定する「規矩」図の構造的解釈である。人間世界創造・救済の六種の水生動物に象徴される生態と方位の説き分けから、仏教の「六波羅蜜」を連想する。六波羅蜜とは「忍辱」「精進」「自戒」「布施」「静慮」「知恵」の6つで、菩薩たるべきものに求められる修行である。これは仏教特有の教えであるが、基本的には 普遍的かつ宗教的な意味をもっている。いわゆる「元の理」における人間創造の6つの道具はこの原理と同様で、人間に与えられた脳力・行動の6つの種類、すなわち「生きる」「活動する」「行動を選択する」「他に奉仕する」「自己を守る」「言葉を用いる」という行動を包括するという。つまり、六波羅蜜を成立させる前提には、「元の理」において6つの人間世界創造に選ばれた道具がエコロジカルに象徴する人間の基本構造と機能が見られると解釈するわけである。なお蔵内の本規矩図にある「矩」の道具集などの英訳と、「規」の星々の配置は、編集者が英語名で追記した。後者の初出は『G・TEN』23号掲載の大柳義徳「十柱の神」と星象(1987年)である。

教団付置研究所懇話会第15回年次大会に出席

9月29日、中山身語正宗大本山瀧光徳寺(佐賀県基山町)にて標記大会が開催され、高見所長と金子昭が出席した。おやさと研究所は大学付置のためオブザーバー参加の形であるが、同懇話会には設立当初から関わってきている。今回の大会は中山身語正宗教学研究所在当番事務局として主催し、オブザーバー研究所を含めて16の教団付置研究所から合わせて71名が参加した。大会テーマは「日々の信仰生活の中の平和一戦後70年から未来へ」であり、このテーマの下に次の3つの発表が行われた。

発表1

「戦後復興期の金光教における「平和」とその文脈」
(児山真生・金光教学研究部所長)

発表2

「曹洞宗における非戦平和の取組みについて―「愛語」の精神より」
(宮地清彦・曹洞宗総合研究センター専任研究員)

発表3

「真如苑の平和の祈り」
(西浦恭弘・宗教情報センター所長)

昼食後に施設見学が予定されていたが、折あしく佐賀県の一部に大雨警報が出されたこともあって中止となり、その代わりに大本山を紹介するスライド上映が行われた。中山身語正宗は、1912年(大正元年)に宗祖覚恵上人により開教された仏教系の新宗教で、「根本大悲の親」である「中山不動尊」を本尊としている。大本山の瀧光徳寺は緑豊かな山林の中に位置し、20万坪の境内地に

40余りの堂塔伽藍や修行場、研修棟などが点在している。

今回、初めての九州での開催となった教団付置研究所懇話会の年次大会であったが、盛況裡に終了し、伝統宗教及び新宗教の教団関係者や研究者とも交流を深めることができた。

(金子昭 記)

新連載執筆のねらい

伝道と翻訳 ―受容と変容の“はざま”で―

成田道広

本連載では、伝道における翻訳の位置と可能性について考察する。布教伝道の過程で、翻訳を介して「教え」がどのように受容され変容するのかを、インドで興った仏教の事例をもとに考察したい。仏教がアジアの広範囲に伝播した歴史的事実に鑑み、仏教經典の翻訳史に触れ、教理の受容と変容の“はざま”で漢訳仏典がどのような役割を担い、機能していたのかを概観し、仏教の異文化伝道の成果を歴史的に検証したい。漢訳の歴史は「訳経史」とよばれ、これまで多くの碩学によって研究されてきた。本連載では、仏教学者による研究成果を踏まえつつ、新たに異文化伝道の見地から客観的にその成果を俯瞰したい。さらに、「訳経僧」の人生と彼らの信仰実践としての經典翻訳とその翻訳論にも焦点を当て、本教の異文化伝道に資する新たな視座を提示し、本教の翻訳における課題と展望について探究したい。

連載執筆者の紹介

成田 道広(なりた みちひろ)

天理大学人間学部宗教学科卒。ネパールサンスクリット大学大学院宗教哲学科博士前期課程修了。現在、後期課程に在籍。

平成21年より天理教海外部翻訳課勤務。平成21年、平成26年東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所短期共同研究員。平成22年4月～平成28年3月天理やまと文化会議委員。平成27年4月から天理大学非常勤講師。

専門はインド学、インド文献学。研究課題はインド宗教史、ネパール宗教史。著書として、『Hindutvako khoji [ヒンドゥーの探求、ネパール語] (Nepal: Mahendra Sanskrit University, 2006) や『アジア語楽紀行 旅するネパール語』コラム担当、(日本放送出版協会、2007)がある。

『グローバル天理』 合本のご案内

2010年から2015年に出版された『グローバル天理』の合本を頒布しています。これは各1年分(12号分)を1冊にまとめ、簡易製本したものです(頒価は200円)。

合本はご注文を受けて製本しておりますので、研究所事務室にお越しの際は、必ず事前に電話、FAX、もしくはEメールでご連絡ください。なお、郵送による頒布はできかねますので、ご了承ください。